

Numazu association for International Communications & Exchanges

—Vol.44—

発行日 2002年11月30日
発行者 NICE沼津国際交流協会
(企画広報部会)
所在地 沼津市御幸町16番1号
(事務局) 沼津市役所地域づくり推進課国際交流室内
☎055-934-2529



**平成14年度
前半期活動アラカルト**

平成14年度 沼津国際交流協会総会

新役員決定!

平成14年度沼津国際交流協会の総会が5月26日(日)沼津市日の出町のホテル沼津キャッスルで午後1時より開催されました。今年は、例年平日の夜開催していましたが、総会を日曜日の昼間開催に変更してみました。休日の方が時間がとりやすいのでは、又、軽食(ティーパーティー)による懇親会にすることにより、懇親会費の軽減ができ、より多くの会員が出席しやすくなるのではとの考えから日時を設定してみました、いかがでしたでしょうか。



小林会長が議長を務め、平成13年度事業報告から会計報告、監査報告と議事がスムーズに進行し、本年度は役員改選の年度にあたる為、選考委員会が招集され、しばし休憩の後、選考委員長より選考結果の報告がなされ、満場一致で新役員が決定されました。

なんとか小林会長の留任を引き出した今回の役員選考でした。そして会長の職務軽減を図るべく副会長を1名増やし5名として、副会長それぞれに部会を担当してもらい会長に代わり統括してもらうようにしました。

新年度の事業計画・予算も滞りなく終了した後、今回理事を退任しました本多傳前岳陽部会部会長と鈴木清光前カラマズ一部会副会長に感謝状が贈呈されました。特に本多傳前岳陽部会部会長には、協会設立時より10年の長きに渡り、役員を務めていただきました。お二方、本当にご苦労様でした。

新年度役員は以下の通りです。

- 会 長 小林 裕 幸
- 副会長 青木 章 夫 (国際理解教育部会担当)
- 副会長 田 中 治 之 (企画広報部会担当)
- 副会長 徳 田 和 人 (カラマズ一部会担当)
- 副会長 長 澤 芳 明 (ふれあい部会担当)
- 副会長 長 濱 昇 (岳陽部会担当)
- 理 事 久保田 実
- 理 事 齋 藤 哲 一
- 理 事 笹 原 嘉 純
- 理 事 鈴 木 康 圀
- 理 事 渡 辺 昶
- 理 事 飯 塚 信 子 (企画広報部会部会長)
- 理 事 渡 辺 俊 次 (" 副部会長)
- 理 事 高 澤 け い 子 (国際理解教育部会部会長)
- 理 事 山 本 敦 子 (" 副部会長)
- 理 事 杉 原 勢 津 子 (ふれあい部会部会長)
- 理 事 鈴 木 貴 雄 (" 副部会長)
- 理 事 中 村 房 子 (カラマズ一部会部会長)
- 理 事 池 田 力 (" 副部会長)
- 理 事 日 野 原 三 郎 (岳陽部会部会長)
- 理 事 青 木 功 (" 副部会長)
- 監 事 多 賀 義 明
- 監 事 安 田 政 義

総会が無事終了し、会場を隣に移して楽しい懇親会の時間となりました。「大石光雄&グレイス・コンチェルト」に「ミセスアモーレ」の皆様がジョイントされ、12名によるハンドベル演奏をしてもらいました。CDのタイトル「あなたを優しくさせるハンドベルシャワー」の如く、気持ちが優しくなるひと時を感じさせてもらいました。又、会員の皆さんがハンドベルを演奏?する体験タイムを設けてもらい、和気藹々とした楽しい懇親会を過ごすことができました。ある人には、ビールが飲み足りなかったことと思いますが……。



日中国交正常化30周年にふさわしい 盛り沢山な交流を

第1回中国料理教室

7月14日(日)第一地区センターにて本年度第1回目の中国料理教室が行われました。参加者18名、スタッフ8名、講師1名。講師の陳浩さんは中国の天津の生まれで、現在浜松大学で中国語の非常勤講師をされています。



献立は清炒鶏糸（鶏肉と竹の子の炒め物）・焼き茄子（茄子の甘味炒め）・蕃茄鶏蛋湯（トマトと卵のスープ）の3品でした。先生の手順説明をその都度受けながら、各グループで調理、主婦の方が大半でしたが、包丁を持ち慣れない若い人達にも、比較的簡単な料理だったため、スムーズに出来上がりました。陳先生の郷里天津は塩味が主ということでした。程よい塩加減と紹興酒とのまろやかな味付けで、中国料理の地域性の違いを学びました。



試食の後、天津の伝統文化の掛け軸（天津楊柳青年画）を見せていただきました。昔は農民が農閑期の時に作っていた版画で、現在は専門家が制作しているそうです。見せていただいた

掛け軸は、美しい女性が子供に魚釣りをせがまれ、釣りざおを持ち、子供と連れ立っている絵です。子供の嬉しそうな表情とは対比的に女性の美しい顔には心配事による憂いが漂っています。見事な色使いに賛嘆の声が上がりました。他にもおめでたい絵などはお正月やお祝いの時に家に飾るそうです。

和気あいあいの中、次の教室の申込みを今すぐしたいという人も出たほど、皆様に喜んでいただきました。

（第1回中国料理教室 スタッフ 大川薫）

第2回中国料理教室

9月29日(日)に、福建省出身の唐美婷さんを講師に迎え、白身魚の香味揚げ、中華風すいとん、鶏手羽もと肉・卵・豚レバーの煮込みの3品を作り、参加者全員で試食しました。

「福建省の田舎料理」と言っておりましたが、日本でも手軽に手に入る食材で、しかも本格的な中華風味に出来上がった料理に皆さん感動し、満足げに舌鼓を打ちました。



岳陽部会

中国語講座を終了して

(5月31日～8月30日)

参加者からの要望を踏まえて、今年は1クラス25名、3クラスで12回の日程と、増枠して行いました。

参加者はそれぞれ目的意識を持って、初級、中級クラスに分かれて勉強しました。

ある人たちはこれを契機に引き続きグループで勉強していると聞きました。勉学の動機付けの役に立ったかと思うと来年は更なる展開をしたいと思います。

講師は北京出身の河合颯さん、上海出身の熊谷虹さん、福建省出身の川西平子さんでした。



岳陽市旅遊業界訪日団来沼

(8月21日)

岳陽市のホテル関係者など一行17名が沼津市を訪問しました。沼津商工会議所において市内のホテル業界の代表者たちと、活発な意見の交換がされました。



岳陽市医療研修生来沼

9月22日岳陽市より医療研修のために2人の女医さん、皮小蓉さん(神経内科)と晏亦斌さん(内科)が来沼しました。現在沼津市立病院で日夜研修漬けの日々です。息抜きと、早く沼津の生活に慣れてもらうために千本浜にて有志30名程でバーベキューをしました。

緑の松原を背に、初めて目にする冬仕度の富士山の遠景、そして前には紺碧の海。絶好の場所で、好天の初秋10月14日。彼女達は白衣姿の時とはまた違った笑顔で友好を深めました。

浜辺に腰を下ろし、大海に向かって「大海啊故郷」など中国語の歌の大合唱!

日中両国旗の前で和服の試着……実りのある秋に実りのある交流会でした。



友好都市 岳陽市への留学生募集

平成15年4月派遣

応募締切 平成15年1月31日(金)

申込み NICE事務局 ☎934-2529

国際理解教育部会

インターナショナル・クッキングサロン

8月4日(日)第一地区センターで、今年度第一回目の国際交流サロン、「インターナショナル・クッキングサロン」が、講師にベトナム出身でふじのくに親善大使の静岡大学大学院留学生、ラム・ティ・ホアンランさんをお迎えして開催されました。ベトナム料理はあまり習う機会がないためか、主婦を中心に人気が集まり、20人余りが参加しました。

メニューは、ゴイ・クウォン(生春巻)、フォー・ガー(ベトナム風うどん)、バナナアイスクリームの3品。

生春巻は、ベトナムの主食である米を加工したライスペーパーで、ゆでたむきえび、豚肉、ニラ、きゅうり、ピーマンなどを巻き、赤みそやバターピーナッツなどで作ったたれをつけて食べるもので調理も楽しめるものでした。

試食会では、簡単なベトナム語のあいさつを教わったり、ベトナムの食事や交通手段など日常生活の中の興味深いお話も伺うことができ、とても楽しいサロンとなりました。

ベトナムが少し身近に感じられるようになりました。


第11回英語&日本語スピーチコンテスト

10月13日(日)、沼津市立図書館の視聴覚ホールにおいて、第11回英語&日本語スピーチコンテストが開催されました。

今年度の出場者は、英語の部4人、日本語の部6人と大変少なかったのですが、それぞれのスピーチにはしっかりとした主張と思いが込められており、個性的に自己表現される姿は、聴衆を引き込むものがありました。

英語の部で優勝された葦科久美子さんは、カラマズー留学を終えて帰国し、その報告もされましたが、彼女のスピーチを聞いた日本語の部の出場者から、「日本に来て、こんなにきれいな英語を聞いたのは彼女が初めてです。」と、その発音を絶賛する声が聞かれました。

また、毎年日本語の部のスピーチを楽しみに聞きに来られるファンの方がいると聞いていましたが、なるほど外国籍の方による日本語のスピーチは、われわれにとって「目から鱗」といった内容も多くありました。入賞者は3名とも国立沼津高専の留学生の方でしたが、クラスの中で話しかけてくれる友達がいなかったといった内容には、言葉を越えて交流できたらいいのという思いを強く持ちました。

さらに今回のイベントは、スタッフとして参加した私たちにさまざまな課題と意識改革をもたらしてくれたという点でも、大変意義があったと考えています。

開催日程、図書館側との打ち合わせ、スタッフによる早期運営、周知活動や出場者の勧誘方法の工夫、集客のための活動などを、改めて見直す機会となったからです。

運営スタッフの皆さん、ご苦勞様でした。それから、ご協力ありがとうございました。来年も、ぜひ、感動できるコンテストにしましょう。そのために、広くいろいろな方からご意見、ご感想を聞かせていただけたらと思います。



Seeing is believing

藁科久美子 (わらしなくみこ) 沼津東高等学校3年 (沼津市岡宮)

I was a girl who didn't do as I said. I was going to be a senior in my high school and I'd been hoping to study abroad in America. I often had big ideas but I usually didn't end up following through with them. It was one of my biggest faults. But finally I made the decision to go to America, which was the most important one I'd ever made. I had had that dream since I was a Junior High School student.

Once I had made up my mind, I worked hard and I got a chance to live in America for ten months. I couldn't believe that my dream was actually becoming real. I had so many emotions - excitement, a sense of responsibility, anxiety and hope for the future.

The first week in America felt like an entire month. I had learned English for five and a half years but suddenly it seemed like a completely different language to me. "Who is talking to whom?" "What are they talking about?" I asked myself, but I had no idea. I was shocked by my lack of ability in English. Fortunately, I received many messages from my friends and family in Japan. Reading these messages every single day and talking with my host family cheered me up. Yet what really changed my school life was joining the Cross Country team. I really don't like running at all but I had been advised to try Cross Country and I didn't want to refuse. It was extremely hard for me at first, but after a while it became the most pleasant part of my day. My friends on the team were always nice and fun to be around. Though I couldn't join in most of their conversations, I kept going to practice every day after school just because I was very happy to be with them.

One simple phrase "Hi, Kumiko!" could make my day much happier. In Japan, my friends and I hung out and talked together quite often. I felt like they knew me really well. But in America I felt lonely at first because I couldn't communicate my thoughts and feelings very well to other students. This experience made me realize how important my friends in Japan are to me and how much they support me. It also made me appreciate how easy it is to communicate my thoughts and ideas in my own language. I think that this is a wonderful gift and that people shouldn't take it for granted.

Before I went to America, I knew about it only from what I'd seen and heard on the news and from what my friends who had visited America told me. I thought I knew what most Americans were like. However, during my year abroad, I met many Americans and I learned that every person is different. Most of the people I met were very warm and friendly and I really liked how they greeted other people with a smile. By living in America, I also discovered many good things about Japan. For example, Japanese people are very considerate. And, Japan has many rich cultural traditions. Also, we eat healthy foods and are very active because we ride bicycles and walk often.

There is one thing I noticed which both America and Japan have in common and which I think is common across the whole world. It is the power of a smile. Smiling is a very simple thing but it can always make people happy. My friends in America used to say, "Kumiko, your smile cheers me up." It made me feel like I could do something for them, even though I couldn't speak English very well. I will never forget their words or their smiles, so I want to keep smiling. And I would like to help someone in Japan who needs help just as my friends in America helped me. Through this exchange year, I grew to like America a lot and to appreciate Japan even more than before. I feel very proud to be Japanese.

Thank you.

僕はガイジンなの…?

デーワガマゲー ダナシリ ウィジェーダーサ 沼津工業高等専門学校留学生（スリ・ランカ出身）

こんにちは。皆さん、スリ・ランカという国はご存知でしょうか。スリ・ランカはインドの南にある、小さな美しい島です。スリ・ランカにいる時、日本は平和な国で日本人がとても親切な人と聞いていました。日本に来て、一年間半経ちました。最初の一年間東京で日本語を勉強して、今年の4月、沼津高専に入りました。今まで経験したことの中で、国で聞いていたことと合っていることと、全然合わないこともたくさんあります。

沼津に来て、道に迷ってしまったことがありました。その時、道を歩いていた日本人が、私を駅まで連れて行ってくれました。その人がやってくれたことによって私は電車に間に合いました。国にいた頃、日本人が勤勉な人だと知っていました。去年私は住んでいた寮の寮事務の人がひまな時寮の周りを掃除していたのを見て、本当に驚きました。自分の仕事でもないのに、やっていることをしっかりやっているのを見て感動しました。同じく高専で私のチューターもとても仲良くなって一緒に学校へ行ったり、勉強でわからなかったことがあれば丁寧に説明してくれたりします。私は、スリ・ランカにいた頃私が持っていたイメージと同じような人でうれしく思っています。

しかし、一方で、日本での生活で、悩んでいることも少なくありません。高専に入って6ヶ月経っても友達になったのは5、6人しかいません。46人いるクラスで、ひとつの言葉さえ話さなかった人は半分以上です。日本語を勉強していた頃、いろいろな国から来たたくさんの留学生が同じ寮に住んでいました。日本語が全然できなかったときも、片言の英語で話してとても仲良い友達になりました。友情を作るために言葉が壁じゃないと思いました。

しかし今うちのクラスで日本人学生が私とあまり話さないというのは本当に悲しいです。自分からいつも話しかけても、その時返事だけです。続けて何も話してくれません。だから自分から話しかけても意味がないと思っています。私はとても寂しくて、他の留学生と一緒に話しているとき「おまえと日本人が話しているのか」私は「あまりないね」と言ったとき、「俺らは一緒にいた頃楽しかったなあ」と言いました。今、クラスメイトが私を「ダナシリさん」と呼んでいます。しかし、日本人学生が話しているとき、「おまえ、何やってるの?」「ハラダ、おまえ何で寝ているの?」とか言ったりします。私も、皆と同じく考えられ、「おまえ」と呼ばれてほしいです。

何でいつもクラスメイトがいつもクラスの中で自分が別人だと考えられているような気がします。何で私と日本人があまり話さないのか、日本人が私と話すのはいやですか?日本人は外国人のことをどう思っているのかまだまだわかりません。多くの日本人が外国人とあまり話したくないなあとは私は思っています。だから、日本の皆さんに、私はお願いしたいことがあります。外国人でも、日本人と同じく考えて話してください。

ありがとうございました。



英語の部優勝
薬科久美子さん



日本語の部優勝
デーワガマゲーダナシリウィジェーダーサさん

ふれあい部会

「燦々おどり」で熱い暑い国際交流!

7月27日に、ぬまづ夏まつりのプログラムになっています燦々おどりに参加しました。

今年は外国人の練習参加が少なく心配でした。でも、当日の集合時間には、一般参加者が加わり少しずつ華やかなものになっていきました。熱い日差しの中、踊った人・裏方の人、そして、応援してくれた方ご苦労様でした。

「民族衣装がとても良く、踊りも楽しそう。賞を取るかと思ったよ!!」知人の談話です。来年の実施を心配しながらも、NICEも企画を一考しましょう。



「NICE ソーラー」の掛け声で

陳 浩

7月27日、年に一度の「沼津燦々踊り」が開催された。天気は暑かったけれども、メンバー達は皆やる気一杯だった。もうすぐ、街で踊りが始まる。「はっぴ」という日本の伝統衣装を着て、塩川さんが用意してくれた中国の笠を被り、長谷川さんの奥さんが赤、青、黄の色を使って僕の顔に簡単な模様を描いてくれた。鏡を見たら、アメリカのインディアンみたいだ。

私達チームが登場する番だと、皆大声で「NICE ソーラー」と呼びかけた。「NICE」は沼津国際交流協会の英語の省略だ。一週間前から何回も練習していたが、登場した時間は10分しかなかった。踊りがはずんで、終わったが、なにか物足りない。ただ、汗をたらたらと流していた。

二年前、「沼津燦々踊り」を見たことがある。その時、人々が多くて、街は賑やかだった。三々五々浴衣を着た若い男女、扇子を持ってゆったりとしているお爺ちゃん、お婆ちゃん、水の中で風船玉を擲っていた子供達。特に、踊りをする人たちは、僕を引きつけた。日本の伝統的な踊りが綺麗だし、音楽も素晴らしい。見る事も面白いが、やることの方がもっと面白いと思っていた。そして、遂に今年は、「外国人と日本人の混成チーム」に参加することができた。

祭り開催一週間前から、踊りを練習していた。踊りの振り付けが美しいし、そんなに難しくない。家に帰ると、その踊りが、誰によってつくられたか、どんな意味を現しているのか、仕事の場面が再現されているのかもしれないが、どんな仕事だろうか、そんな綺麗な踊りの中に「頭痛」という一動作がある。僕にはどうしてそう呼ばれるのか、良くはわからない。

練習の時、岳陽部会の塩川さんと一緒にいた。塩川さんは中国の重慶の旅行から帰ったばかりだ。中国旅行の時撮った写真を見せてくれた。北京、重慶、承德、胡宮、大仏と寺院。懐かしいので、借りて家で妻と一緒に見た。

この活動を通じて、長谷川さんのほか、沢山の人たちに久しぶりに会えた。そして、新しい友達にも知り合えて、とても嬉しかった。

小林会長さんは、何回も中国の西安や黄山などへ行かれた。そのお話しの中の南山寺について、僕も、全く聞いたことがなかった。会長さんは、中国の地図を持って来て、南山寺の位置を教えて下さった。反省会の時、参加された皆さん方が中国の事情に大変深く明るいことに驚愕させられた。

僕は、日中友好のことをやりたい。踊りの活動を経て、日本の文化を少し理解し、多くの沼津に住む方々と交流できた。日本の皆さんは、中国人の私を少しは少しは理解して下さいませんか。これからも、日中友好のために、頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

40周年を来年にひかえて!

市民訪問団10名が市立校生10名、引率教師2名とともに、7月19日より26日まで姉妹都市カラマズーを訪問、ホームステイをしながら、友好の輪を広げました。いつものように市庁舎には、歓迎の‘カラマズー・沼津姉妹都市提携39周年’の横断幕が掲げられている。市庁舎前のブロンソン公園の楓（35周年の訪問時に記念植樹）も大きくなり、風にゆれている。アメリカへ到着してから、ふだんよりずっと多い国旗や、国旗をあしらったものが眼につく。テロ以降だろうが、1年近くたった今もいろいろな意味での問題提起のような気がする。

ステイ中は、あちらのプログラムに従って、毎日が楽しく、笑っているうちに過ぎ、ときには、予定変更、カット、とフレキシブルな対応。入念な計画でないのがすまないこちらとは大いに違い、それもまた楽しからずやと対応。そんな言葉や気持ちのやりとりが心地よくあっという間に26日になってしまった。

姉妹都市カラマズー市 訪問記

寺田麗子



◆ホストファミリーとの出会い

2002年7月19日、カラマズーの地を踏む。地元のチャーチにホストたちがすでに集まり、少し遅れて我がホストが到着した。「Are you Reiko?」彼女の笑顔は、手元の彼ら夫婦の写真そのままに、温かかった。自分と年齢を同じくする人達との異国での生活が始まる。そう思うと心が踊った。今まで経験したどのホームステイとも一味違うものになる予感がした。

カラマズー入りしてすぐ週末に入ったので、週明けまでの3日間はホストと過ごすことになっていた。着いたその日に、近くの町で行われる友人のウェディングパーティーに出席するために訪れた、ホストの友人夫妻が加わり、その

夜のバーベキューディナーは賑やかなものとなった。4年間の日本滞在歴を持つホストのJenniferが、「一度すいか割りをしてみたかったの!」と、すいか割りゲームが始まったりで、大いに盛り上がった。ちなみにすいかを割るのに使われたのは細いほうきの柄で、思いっきり叩きつけられたせいで真っ二つに折れた。そこで終わらないのがアメリカだ。別のほうき（懲りずに、又ほうき!）を取り出してきて再開。結局、Jenniferがwinnerになった。

こうして、カラマズーの第一夜は興奮のうちにふけていった。

◆熱いひと夏の夜

奇しくも、第二日目7月20日は、ホスト夫婦の5度目のウェディングアニバーサリーであった!こんな記念すべき日に共に祝えるなんて、なんと喜ばしくラッキーなことか。とこいつつ、お邪魔虫にならないかしら…と、少し気を揉んだ。

昼間はミシガン湖畔のビーチで海水浴ならず湖水浴と昼寝を楽しみ、夜はラテンフェスティバルでダンスを楽しんだ。折角の記念日なのだし、と思い、2人でダンスしてきなよ、と促した。ダンスはあまり自分からはしないタイプのMattをJenniferが上手にリードし、仲睦まじくラテンのテンポに身をゆだねる2人は、本当に幸せそうだった。暫らくポーっと2人を見つめていたが、しかし、ラテン系のリズムは私にとっては最高に乗れる音楽。ただ見ているだけでは勿体無い。とうとう我慢できなくなって、私

カラマズ一部会

も踊りに加わった！リズムにすっかり陶酔してステップを踏む自分を感じながら、同じこと日本じゃできないな、などと考えたりした。アメリカの開放的なエネルギーの力が、私に奏させたのかも知れなかった。会場の熱気と汗にまみれてぐちゃぐちゃになった私たち3人は、踊りつかれ果て、車に乗り込み会場を後にした。暑い暑い夜だった。



◆ Strange or unusual?

日曜日の夜は、エチオピア料理屋へ。彼らは、もうすでに十分疲れているはずだったが、少しでも私により体験をしてもらおうと、楽しむための様々な提案をしてくれた。その中でも、Mattが生まれ育った町 Ann Arbor へ行き、街の雰囲気を楽しみながら彼らのお気に入りの料理屋で舌鼓を打つ、というものが気に入った。

私にとっては初めてのアフリカ料理。形式はいたってシンプル。餃子の皮のようなクレープのような薄皮に、テーブル一面に盛られた7~8種類ほどの様々な具を包んで食べるのだ。食べ放題形式だから、気に入った具は際限なく食べられる。「もう、いらない。おなかいっぱい。」と Matt & Jennifer。「まだまだ、いける。」と私。どこに行っても「よく食べるね」といわれるが、アメリカに来てと言われるとは。「私は Reiko が、本当に自由に振舞っているのが嬉しい。」と Jennifer。「日本人はかしこまって、本当は食べたくても、『いいです。』といたりするでしょ。」「そう、私は自分が試してみたいものは試してみるの。おいしいかまずいかはどうでもいいの。トライしなかったら、それさえわからないしね。」「あなたみたいな日本人は珍しいね。」「そう。実際私は日本人の間でも大体において strange なの。」(場は爆笑)「(笑いながら) いや、それは unusual だよ。」と Matt。「strange と unusual の違いって何?」「うーん、strange はどちらかという

ネガティブな意味で、unusual はいいニュアンスがある。」「そう、それじゃ、やっぱり私は strange ね。」

◆ アバウトなアメリカン

週明けの4日間は訪問団まとまっの観光となった。一応予定表では予定は組まれているのだが、予定は未定、みたいなどころがあって、アメリカという国では多少の変更はいつものこと?らしかった。まず、道案内。行き当たりばったりのところがあって、時間がいたずらに過ぎていく場面もしばしば。また、アポがきちんと取れていなかったため、待った挙句急遽予定を変更して前後を入れ替えたりと、あまりの効率の悪さに「?」と思うこともあったが、このアバウトさゆえにアメリカの大胆さというのが生まれているのかもしれないとも思う。

私が乗せていただいた車は、現地のボランティアの1人の方のバンだったのだが、観光途中で乗り降りを繰り返すうちドアの調子が閉まらなくなり、ドア付近にいた市立高の引率の先生方がドアの修復に躍起になっているのを、運転席からゆったりながめ、どうにもならないかな…という状況を察知したのか、ようやく様子を見ようと車を降りてきてくれた。試行錯誤の後、やはり修理に出さないと直らないと判明。仕方がないのでドアが完全にしまらないまま、内側から開かないように抑えて行くことに。それにしてもこの焦らないさま、全く動じないこの余裕!凄い。



カラマズー部会

◆本当の町の景色

明日でカラマズーを後にするという日の夕方、ホストが「あなたには理解できるだろうから」と、町のある区域へ連れて行ってしてくれた。そこはアフリカンアメリカンの多く住む区域だった。そこでは、アングロサクソン系のアメリカ人居住区域とはいくらか異なる生活様式をもつから、町のある線を境界に、くっきりとそれらの区域が分かれているのが、新参者の私にもはっきりと判った。「私の知り合いの中には、『危険だからこの区域へ足を踏み入れるべきではない』、と言う人もいる。だけど、それは間違いだと思う。全く馬鹿げている。あなたは街のいわゆる『クリーン』な部分しか見せられていなかった。だけど、あなたには真のこの町を知ってもらいたかった。」町の一角に、いたって普通のビルディングがあった。「あれは、ああ見えて教会なの。あの教会にはかなりの多くの白人も行く。彼らは、互いの理解を深めようと集まる人々なの。わたしもそのうち行ってみるつもり。」私の胸に込みあがってくるものを感じた。「なんか、悲しい。」「どうしてそう感じるの?」「わからない。ただ、そう感じた。多分、そうして、その個人のキャラクターや性質というものには全く関係なく、ただ肌の色が違うと言うだけで互いのコミュニケーションの機会が失われる、その無意味さに悲しいと感じたんだと思う。」海外の各国に留学生を送る仕事をしているホストが、こう言った。「私の学生の中にはアフリカの学校へ留学する人もいる。彼らの立場は、こことは全く逆になる。彼らは少数派になる。謙虚になれなくて考え方を換えられない学生は、帰ってきてしまう人もいる。」これはアメリカという国の現実の一部分だ。日本にも似た部分を見つけられるかもしれないが、きわめて少ないと思う。

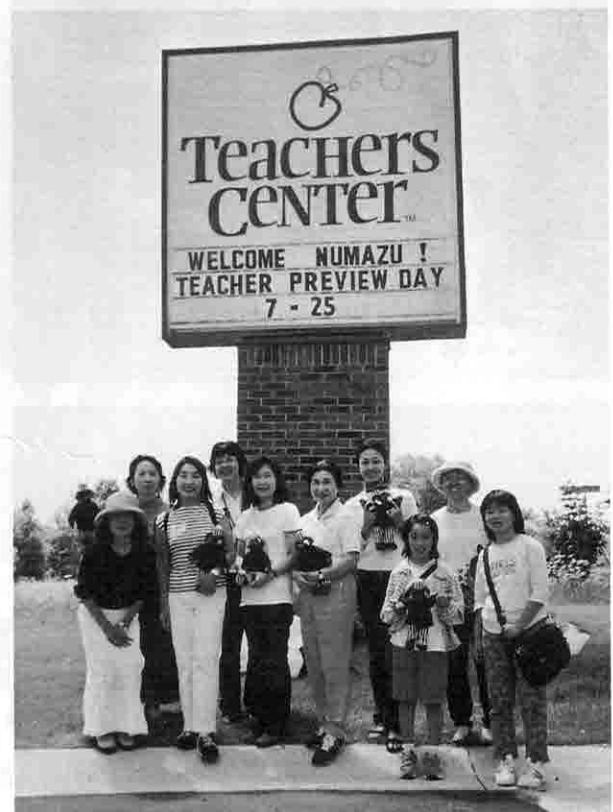
私はこのホストによってこの上なく貴重な「知る」という体験ができた。その国のいろんな面を知ること、少しずつその国の真の姿に近づくことができる。物事の多面性を受け入れなければ、その現実を知ることはない。その現実を知り、受け入れ、尊重し、活かす。それを双方で行う。国際交流も、個人的な人間づきあいも、基本は同じだ。目的は権力争いではなく、よさを活かしあうこと。

1週間のホームステイ。期間としては短かっ

たが自分の中に問題提起するには十分だった。そして、1週間しか生活をともにしなかったのに、何だかもう随分長い間知っているように思わせるほどに、深いつながりを感じさせてくれた縁あるホストファミリーと出会ったことは、まさに幸運としか言いようがない。



最後に、このような体験をするきっかけを与えてくれた沼津とカラマズーの姉妹都市交流協会の各皆様と、意味深い旅の同行者となってくれた沼津市民訪問団の方々、そして私の心からの友人となってくれた Matt and Jennifer White Reding 夫妻に、こころから感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。



交換教師を囲んで

カラマズーからの交換教師 シンシア・ジョアンさん

ウェスタンミシガン大学で演劇を専攻。女優を目指してカリフォルニアで数年過ごしたが、方向転換。ミシガン大学で日本人の留学生に英語を教える一方、駐在員の奥さまに英語を教えながら日本語を学ぶ。

市立校へのALT ダニエル・ボードマンさん

1980年、ミシガン州生まれ。外交官である父の転勤に伴い、世界各国をまわりながら成長する。ミネソタカールトンカレッジで経済学を専攻。関西外国語大学にも短期留学の経験がある。

このお二人の歓迎会を10月10日レストラン‘かぼちゃ’で開催。いろいろなお話をうかがいながら楽しく過ごし、シンシアは、得意の美声を披露。When I dreamのカントリーポップスにアンコールを求める拍手が。パフォーマンス豊かに授業をすすめるシンシア、世界の面白いお話に引き込まれる生徒たちを想像しました。



お知らせ

Year End Party に参加してみませんか？

～日頃なりたい人物に変身してみませんか～

- と き** 2002年12月14日(出)
午後6時00分～午後8時30分
- と ころ** 千本プラザ
- 内 容** ポットラックディナー
バンド演奏による仮装ダンスパーティ
仮装コンテスト
- 定 員** 約120名
- 参加費** 1,000円 (中学生以下は無料)

※参加者は夕食になるものを一人一品必ず持ち寄ること

- 申込方法** 参加費を直接事務局まで持参
- 受付時間** 月～金
午前8時30分～午後5時15分
- 申込み** 沼津国際交流教会 (NICE) 事務局
055-934-25259
(市役所1F国際交流室内)

諸般の事情から、広報紙の発行が大幅に遅れてしまい、皆さまにご迷惑をお掛けしたことを、ここにお詫び申し上げます。

企画広報部会

